

# マイ・ストーリー

## 水島優

みずしま ゆう

### わたしはこんな人

のんびり屋で楽観的。前向きで向上心が強く、好奇心がおうせいです。好きなことには、全精力をかたむけて取りくみます。また、人なつっこいほうだと思います。いったん信用して気をゆるした人に対しては、自分自身をさらけ出すことができます。一方で、感情の起伏が激しく、ちょっとしたことですぐに落ちこんだりします。人に気をつかいます。てしまうのです。もう少し鈍感になればいいのになあと思います。

以前、友だちに、「優は、赤でも青でもない、紫みたいな人。いろんな面をもっているから」と言われたことがあります。そのことがうれしくて、それ以来、紫が好きになりました。

### おいたち

#### 小さいころ

わたしは、1983年に神奈川県川崎市で生まれました。小学2年生のときに横浜市<sup>2</sup>に引っ越してきました。それからずっと横浜に住んでいます。だから、横浜がわたしのふるさとなのかなと思います。5歳のときに妹が生まれるまで1人っ子だったので、両親には大事に育てられました。とても自由に

育ててくれたおかげで、小さいときから自分のやりたいことをはっきりと主張する子だったようです。幼稚園のころはおとなしくて、母に本を読んでもらったり、絵をかいたりするのが好きでした。

#### 小学生のころ

小学校時代の成績は、それほどよくもなく悪くもなく、成績のことでとくに問題になることはありませんでした。4年生から3年間、クラブ活動で新体操をしていました。先輩たちがボールやりボンなどを使って演技する様子がとてもかっこよく見えたので、自分もやりたいと思って始めました。

#### 中学生のころ

ブラスバンド部に所属して、フルートを吹いていました。でも、1年生の2学期に生徒会に入ると、そちらのほうの活動が忙しくなり、ブラスバンド部は休みがちになりました。

生徒会はみんなでお祭りのようにワイワイとやるころだったので、とても楽しかったです。いちばん印象に残っているのは、マリ共和国のサハラ砂漠隣接地帯を砂漠化から守る植林活動に対して寄付金を送るために、いろいろな活動に取りくんだことです。わたしは文化祭で寄付を募るため、寸劇の脚本を書いたりしました。文章をまとめたり、書いたりするのは、小学生のころから好きでした。中

がっこう ぶん か さい しらゆきひめ きやくほん か  
学校では、文化祭のために『白雪姫』の脚本を書  
きました。また、祖母の戦争体験を聞き書きした文  
しょう ぱくぶつかん てん じ  
章が博物館に展示されたこともありました。

## こうこうせいかつ 高校生活

### つる み こうこう 鶴見高校へ

もともと、ある私立高校の推薦入試<sup>3</sup>を受ける予  
定でした。でも、ぎりぎりになって推薦基準に達して  
いないことがわかり、公立高校に志望を変えなけ  
ればならなくなりました。あわてて、自分の成績の  
レベルにいちばん近い神奈川県立鶴見高校を受  
けん する こと に 決 め、 受 験 勉 強 に 取 り く み ま し た。 と  
にかくやれるだけのことはやろうと勉強した結果、  
つる み こうこう に 入 学 す る こ と が で き ま し た。

つる み こうこう こうそく きび  
鶴見高校の校則はそれほど厳しくありません。学  
校は、生徒を厳しく管理するのではなく、生徒の自  
主性を重んじてくれます。わたしは、つる み こうこう の そ  
ういこう風が好きです。鶴見高校の生徒は、いい  
子で、そこそこ勉強もできるけれど、小さくまとまっ  
ているという印象があります。がんばらないのがい  
いという雰囲気があって、文化祭などの行事も中途  
はんば も 盛 り あ が り で 終 わ っ て し ま い ま す。 そ う い う と  
ころに少しもの足りなさを感じますが、落ちついた  
ぶん い き い ご こ ち かん  
雰囲気には居心地のよさを感じます。

### しゃしん と 写真を撮ること

わたしは写真部に入っています。写真部に入っ  
たのは、ほかの部のように毎日参加する必要がな  
く、自分が好きなときに写真を撮ったり、プリント作  
ぎょう 業 を し た り す れ ば い い と い う と こ ろ が 気 に い っ た か

らです。

しゃしん ぶ はい せんぱい さつえい  
写真部に入ったばかりのころ、先輩たちと撮影  
に出かけました。それまで、わたしはカメラにフィル  
ムを入れる方法さえ知りませんでした。そんなわた  
しに、先輩は「何でも目につくものを撮ってみて。自  
ぶん す 分の好きなものがあればそれを撮ればいいし、ほ  
かの人<sup>ひと</sup>が撮るのをまねして撮ってもいいよ」とアドバ  
イスしてくれました。そこで、楽な気持ちで写真を  
撮りはじめると、シャッターを押す音や感触がと  
ても快く感じられました。アングルを変えるなど、い  
ろいろな撮影のしかたがあるのも、そのとき初めて  
知りました。写真を撮ること自体がとてもおもしろく  
て、その日は結局100枚以上撮影しました。それ  
以来、すっかり写真にのめりこむようになりました。

わたしは人の写真を撮るのが好きです。最初の  
うちは、知らない人にカメラを向けるのがこわかつ  
たり、悪いような気がしたりして、花や建物など風景  
を 中 心 に 写 真 を 撮 っ て い ま し た。 で も、 何 度 か 撮  
影に行くうちに、人にカメラを向けることにも慣れ、  
人を写すのが楽しくなってきました。

人を写した写真は、自分が撮ったものでも、ほか  
の人が撮ったものでも、見ていてとてもおもしろい  
と思います。「この人はどういう人なんだろう」とか、  
「この写真がうまれるまで、撮影者と被写体のあい  
だにはどんなコミュニケーションがあったんだろう」  
とか、いろいろ想像がひろがるのです。たぶん、わ  
たしは人間が好きなのだと思います。

しゃしん し ひと  
写真を撮るきっかけに知りあった人もたくさんいます。  
カメラを持っていると、ふだんなら話しかけることも  
ない人たちと話をすることができます。たとえば、赤  
ちゃんを連れている人には、「赤ちゃん、かわいいい

ですねえ。いくつですか」と声をかけたりします。写真撮りながら、いろいろな人とコミュニケーションをとるのは、本当におもしろいです。写真はわたしの心を映す鏡でもあります。自身自身を写しても、ほかの人やものを写しても、自分の心の動きが写真に表れるのです。ある時期に撮った写真を見ると、人を正面から撮ったり、アップで撮ったりした写真が1枚もありません。後ろ姿や、遠くでだれだかまったくわからない人影のようなものばかり撮っていました。ちょうどそのころ、わたしは自分の企画力や発想に限界を感じていました。あるコンテストに向けて写真を撮っていたのですが、どうしてもイメージをつかみきれずにいました。わたしは、いいアイデアであればほかの人の意見でも積極的に自分の写真に取り入れたいと思っています。でも、そのときは、人の意見にふりまわされるようになっていました。技術のなさはある程度自覚していたけれど、企画力や発想が乏しいというのは、われながらふがいで自分をゆるませませんでした。できあがった写真は、ある程度評価をうけました。でも、自分の写真ではないような気がして好きにはなれませんでした。そのときは、自信をなくして、以前のように積極的に人とコミュニケーションをとりながら撮影をする気になれませんでした。そういうわたしの心境が写真に表れたのだと思います。調子が悪いときのほうが、わたしの内面が写真にはっきり表れるような気がします。調子がいいときは、何も考えなくても、おもしろいように写真が撮れるのです。

## だいがくじゅけん 大学受験

いま 高校2年生なので、大学受験までまだ時間があります。でも、いつも頭のどこかで受験のことが気になっています。鶴見高校の生徒はたいてい2年生まではのんびり過ごしています。でも、3年生になったとたんに、塾に通いはじめるなど、人が変わったように一心不乱に受験勉強に取りくむ人が多くなります。わたしは社会学や政治学が専攻できる大学を受験したいと思っています。ジャーナリズムに関心があるからかもしれません。とくに、社会学を専攻すれば、分野を限定せずにいろいろなことを勉強できそうだし、自分が興味をもっている社会問題を分析して、その解決方法を導きだすことができるかもしれません。大学では、さまざまなタイプのひとであいたいので、なるべく学部の多い大学に入りたいと思っています。

## しょうらい 将来について

将来は、ジャーナリズムの仕事ができればいいなあとと思っています。小さいころからテレビの報道番組が好きでよく見ていました。「自分が関心をもっていることについて調べ、その結果を伝える。それでお金がもらえるなんて、ジャーナリストってなんていい仕事なんだろう」と思っていました。わたしは、写真も撮れて、文章も書けるジャーナリストになりたいと思います。それには、新聞社がいちばんむいているかもしれません。1人の人を追いかけるドキュメンタリーなど、テーマをしぼってじっくり取りくむような仕事がしてみたいです。エリートコースにはのら

なくてもいいけれど、楽しく夢中になれる仕事を  
つけて、生涯ずっと続けていきたいと思っています。  
母にも、「結婚しても、経済力は身につけておいた  
ほうがいい」と言われています。つらいこともあるか  
もしれないけれど、自分のやりたいことを追求し  
ていくつもりです。

## 家族・友だち

### わたしの家族

両親と妹とわたしの4人家族です。わたしにとっ  
て家族は空気みたいな存在です。ふだんはそんな  
に家族の存在を意識したりしません。でも、わたし  
を経済的、精神的に支えながらここまで育ててくれ  
た両親に感謝しています。わたしは、自分がであ  
る最初の社会が家族だと思っています。家族とは  
いえ、自分とは違う人間なので、いっしょに住んで  
いれば意見があわなかったり、いがみあったりする  
こともあります。ぶつかりあいを乗り越えて他人との  
関係をきずいていくための訓練をする最初の社会  
が家族だと思います。

### わたしの友だち

わたしには、クラスの友だちや写真部の仲間な  
ど、いい関係をきずいている友だちがいます。でも、  
一時期、友人関係、とくに女の子どうしのつきあい  
について、とても深く悩んだことがありました。  
高校1年生のとき、昔から仲のよかった同じクラ  
スの子が、突然、口をきいてくれなくなったのです。  
わたしは理由がわからず、「わたしが悪いんだ。ど  
うすればいいんだろう?」みんなわたしのことを嫌

いなのかな?」としばらく悩みました。人を信じるこ  
とができなくなり、一言ことばを発するにも勇気が  
必要でした。相手の反応に過剰に敏感になってい  
て、こう言ったら嫌われるのではないかと、本音をぶ  
つけると気まずくなってしまわないかと、あれ  
これ考えるうちにこわくて何も言えなくなっていまし  
た。わたしは、思ったことをはっきりと、しかも強い  
口調で言ってしまう。別に悪気はないのです  
が、相手には思ったよきつく聞こえて、それで相手  
を傷つけてしまうことがあるのかもしれない。そ  
の女の子がなぜわたしを避けるようになったのか  
今でもよくわかりませんが、もしかしたらわたしの話  
しかたも関係があったのかなと考えたりします。自  
分が全然気にならないようなことでも、人によっては  
気になることもあるのでしょう。

つらい状況でもなんとか学校生活を送ることが  
できたのは、写真部という逃げ場があったからです。  
クラスにいたときはつらくても、写真部の仲間とは楽  
しく過ごすことができました。しばらくすると、クラス  
でも新しい友だちができました。彼女に悩みをうち  
あけると、「みんながあなたのことを嫌っているわけ  
じゃないよ。わたしはそんなふうには思っていないよ」と  
言ってくれました。それでたちなおることができたと  
思います。

今でも人と話すときには気をつかうこともあります。  
周りの目がまったく気にならないというふうになり  
ます。でも、以前のように神経質になることはありません。  
それは、よい友人を得ることができたおかげ  
です。わたしが悩んでいたとき相談にのってくれて、  
わたしが自信をとり先どす手助けをしてくれた友だ  
ち。ありのままのわたしを認めてくれた友だち。そう

という友だちがいなければ、自信をどえどすことも  
人を信じることもできなかったでしょう。つらかった  
けれどわたしにとっては大切な経験だったと、今で  
は思います。よい友人関係をきずくには、自分に自  
信をもつこと、そして相手を信じる必要なの  
だと思うようになりました。

## わたしのまち、横浜

横浜は日本で2番めに人口が多い都市です。自  
然は少ないけれど、とても住みやすいまちだと思  
います。欲しいものは何でもすぐに手に入るし、映画  
館や図書館、美術館など文化施設もたくさんあ  
って、とても刺激的です。

また、横浜港は、150年ほど前に日本が開国  
して以来、国内最大の貿易港です。そのせいか、  
いろいろな国の文化が混ざりあっています。小さい  
ころから、わたしは横浜港周辺の雰囲気が好き  
でした。いろいろな文化が混ざりあっている不思議  
な雰囲気がとても心地よく感じられます。たまに横  
浜港の近くを散歩するのですが、そのたびに新  
しい発見があります。

わたしは、横浜が大好きです。でも、ほかのまち  
にも住んでみたいし、1人暮らしもしてみたいと思  
っています。ほかにも、もっとおもしろいまちや自分  
にあうまちがあるかもしれません。それに、新しい環  
境で1人で生活すれば、自分の新しい面を発見し  
たり、自分自身を成長させたりすることができるよ  
うな気がします。ほかのまちで生活してみたら、横  
浜に対する印象も変わるかもしれません。